

平成20年度 オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）（④美05-08-3/5）

第42回オープンレクチャー「人とモノの力学」

企画情報部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座を毎年秋に開催しており、本年度で42回目を迎えた。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、2日間連続で開講し、聴講者の便宜を図るように努めた。今回も昨年度に引き続き「人とモノの力学」をテーマに掲げた。個々の講演内容は以下の通りである。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開く「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。

今回は2日間でのべ277人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、191人から回答を得た（回収率：68%）。結果は、「たいへん満足した」64人、「おおむね満足した」91人、「普通だった」13人、「不満が残った」3人、回答者の91%が満足感を得たことがわかった。

第1日：2008年10月3日（金）午後1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

・勝木言一郎（東京文化財研究所）「鬼子母神の源流をたずねる」

鬼子母神は仏教における子供と安産の守り神で、その姿は右手にザクロの実を持ちながら、子供を抱く天女のような姿に表されてきた。台東区入谷にも「おそれいりやの鬼子母神」で知られる真源寺があり、なじみの深い神さまである。本講座においては、インドから西域諸国を経て中国、そして日本にいたる、鬼子母神伝播の過程を探った。

・中川原育子（名古屋大学）「クチャ地域の石窟に描かれた供養者像とその信仰について」

新疆ウイグル自治区のクチャは古代亀茲国にあたり、仏教国として大いに栄えた。この地には多くの石窟寺院、地上寺院が造営され、現地に今なお遺跡として残っている。本講座では、キジル石窟、キジルガハ石窟、クムトラ石窟の3石窟寺院をとりあげ、供養者の種別、人物構成、供養儀礼のあり様、服制などを中心に紹介し、亀茲国の仏教信仰の一端を、石窟内に描かれた供養者像の分析を通じて解き明かした。

第2日：2008年10月4日（土）午後1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

・田中淳（東京文化財研究所）「写真のなかの芸術家たち—黒田清輝を中心に」

公私にかかわる記念として撮影されたポートレート、また生活のひとつまであるスナップ写真など、写真はいろいろな場面で撮影されてきた。そうした写真の中に残された芸術家たちの姿には、作品、もしくは日記などの文字の記録からはうかがうことができない、芸術家の創作の営みが認められる。本講座では、黒田清輝（1866－1924）、有島生馬（1882－1974）をとりあげ、彼らの芸術創作のありようを明らかにした。

・青木茂（文星芸術大学）「明治10年・西南戦争と上野公園地図」

日本で最も有名な銅像といえば東大寺の大仏と上野公園の西郷さんと言える。上野戦争（明治元年1868）の功臣西郷隆盛は西南戦争では逆賊となったが、それにもかかわらず、上野公園に造られた銅像は「西郷さん」と愛称されている。上野公園はもともと寛永寺の境内であったが、そこは上野公園の制定と計画によって大きく変化を遂げた。本講座では、博物館や美術館が建てられ、現在のようにイベント会場となるに至るまでの上野公園地の歴史を考察した。